

審査の結果の要旨

氏名 荒木 夕宇子

本論文は、がん患者の在宅移行・在宅療養期間に関連する要因を明らかにすることを目的とする。都内一医療施設を他の医療機関からの紹介で受診し、2008年4月から2009年3月までの1年間に同施設より死亡診断書を交付された終末期がん患者について、患者の基本属性、介護・社会経済的属性、疾患属性を後方視的に調査し、下記の結果を得ている。

1. 全症例（200例）を対象とした記述統計：全症例のうち、187例の紹介理由は「Best Supportive Care (BSC)目的」であり、13例の紹介理由は「がんの積極的治療またはそのサポート」であった。前者（BSC群）には、後者（治療群）に比して、高齢である、総療養期間・在宅療養期間が短い、独居者の占める割合が高い、日常生活自立度が低い、転院早期（転院から1週間以内）にオピオイドや補液等の治療を受ける者の割合が高いなどの傾向がみられた。これより、BSC群には治療群と比較して高齢かつ介護・社会経済的リソースに乏しく、また転院早期の身体・精神症状がより重篤である、という傾向があることがわかった。

2. BSC群（187例）を対象とした分析：統計解析にはロジスティック回帰分析を用い、従属変数を「在宅移行の有無」として、各独立変数のオッズ比を算出した。その結果、以下の4つの変数、すなわち「紹介元ががん診療連携拠点病院であること」「同居家族がいる（独居でない）」「介護保険認定（または申請）あり」「日常生活自立度が低いこと」と在宅移行との間に関連がみられた。これより、BSC目的で紹介されたがん患者の在宅移行に、地域医療連携体制と介護・社会経済的属性が関与していることが示唆された。

3. BSC目的で紹介され、かつ在宅移行し得た症例（90例）を対象とした分析：統計解析にはロジスティック回帰分析を用いた。「在宅療養期間（日）」を中央値で二分して、「中央値より短い群」と「中央値より長い群」とし、これを2値の従属変数に設定した。その結果、以下の変数、すなわち「下腿浮腫あり」「食思不振あり」「オピオイドの内服あり」「維持輸液（24時間持続）あり」と在宅療養期間が短いこととの間に関連がみられた。これより、在宅療養期間の短さには、疾患属性（患者の全身状態の増悪と呼応する因子）が関与していることが示唆された。

以上、本論文は、がん患者の在宅移行に地域医療連携体制と介護・社会経済的属性が関与していること、および在宅療養期間に疾患属性が関与していることを明らかにした。本研究は、現行の地域医療連携体制や医療機関の特性と、在宅移行・在宅療養期間との関連を示したという点において独創的であり、わが国における在宅緩和医療の普及およびこれを希望する患者・家族の療養生活の改善において、重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。